



作文3部

# 命のお米バトンタッチ

のうりんすいさんだいじんしょう  
農林水産大臣賞

広島県呉市立横路中学校三年

藤川巧汰

るおにぎりは、祖父が種から一生懸命育てたお米。とても明るかつた祖母が半世紀一緒に暮らしてきた人を失ったショックで暗くなつた時、そんな時でも食べるごはんは祖父が毎日丁寧に愛をこめて作つたお米だ。

そこで、僕は思った。

「亡くなつた人が作つた命が、他の命を支えている。」

心の中で支えてくれるだけでなく、体まで支えてくれる。亡くなつた人が他の命を支えているところが目に見えるなんてすごいことだ。こう思うようになつて、僕は少し元気になつたような気がした。

それから数ヶ月が過ぎた。祖母は、知り合いの方々が話しに来て下さつたり、猫を飼い始めたりしたおかげで、少しずつ元気を取り戻している。

祖父のことでも大変だった両親も落ち着いてきた。高校三年生の兄と中学三年生の僕もそれぞれ頑張っている。お米の方は、今は父が育てている。

今までの祖父との会話を思い出したり、祖父が毎日つけていた農業日記や、本などを読んだり、近所の方のお話を聞いたりし、日々勉強している。

しかし、父には会社の仕事があるため、農業ができる時間と体力には限りがある。その中でも父は祖父の米を受け継ごうと全力を尽くしている。

こんな時にもかかわらず、西日本豪雨災害によりホースが流され、田んぼの水が枯れたり、一部の稲が土砂の下敷きになつたりと大変なことが起つた。しかし、家族で協力したことにより被害を最小限にすることができた。その後、稲に穗がついた。ついに、父の努力が実になつたのだ。この時は家族中で喜んだ。

これらのことから、僕にとつてお米とは、家族を繋ぐものだと思う。

何十年も前から、先祖代々受け継がれてきて、今は祖父から父へ、そしてまた次の世代へと。そのお米に、悪いことがあつたら家族みんなで心配し、良いことがあつたら家族みんなで喜ぶ。こうして家族はお米によって強く結ばれている。だから、僕は今からしっかりと父を手伝い、いつかは僕は受け継いでいるようにしたい。そして祖父のように、他の命を支えられる、おいしいお米を作りたい。

僕の家は、代々続く農家だ。といつても今は、家族の分と知り合いに分ける分ぐらいしか作つていない。しかし、それでも祖父母だけでは大変だ。だから、僕は幼い頃から田舎の実家に毎週行き、手伝つてている。特に、田植えや稲刈りの時期は家族中大忙しだ。そして、お米や旬の野菜、果物をもらつていて。そのおかげで、僕はとても元気に育つている。平成二十九年十二月十八日、この日は生徒会役員選挙の結果が発表される日だつた。朝の妙な胸さわぎはそのせいだと思つていた。その日の国語の時間、僕は担任の先生に廊下に呼ばれた。僕は、何かいけないことをしたのかと思い、焦つて自分の行動を振り返つた。

「おじいちゃんがお亡くなりになりました。」

その瞬間、考えていたことが吹き飛んだ。すごくシンプルなのに、僕は先生の言葉が理解できなかつた。僕は静かにパニックになつた。

話によると、いつものように祖母と一人でドラマを観た後、祖母が朝食を作つていて急性心筋梗塞で亡くなつたらしい。不運にもその前の週は、用事があり行けていなかつた。だから、祖父への修学旅行のお金を渡せなかつた。朝、急に亡くなつたから、僕が生徒会長になつたことも、感謝の言葉さえも、言えなかつた。とても身近な人を失つたことのなかつた僕には、今まで感じたことのない悲しみと驚きに耐えられなかつた。

こんなに急に亡くなつてしまつた祖父だが、僕達に残してくれたものがある。たくさんある中で、一番大きいのはお米だと思う。お米は祖父が主に作つていた。お通夜や、お葬式などで集まつた人々にふるまわれ